

今回のポスター発表を通して、オーディエンスとしても発表者としても多くを学び、また貴重な交流の機会となった。また、シンポジウムを通して、信頼という概念自体を深く再考するとともに「間」の持つ重要性や可能性を実感した。私自身の発表も「間」という領域がいかに関係醸成に繋がらうかということに焦点を当てたものだったが、様々な地域での事例を知ることで研究を進める上で非常に重要な知見を得ることができた。

鈴木先生のご発表からは時に命懸けの「賭け」としての側面と、失望との裏返しであるという重要な視点を得ることができた。一般的に信頼とは時間をかけて徐々に醸成されるものであるというイメージがあるが、とりわけ対立関係になる中では、時に即興的で大胆な決断によって得られるということが理解された。「信頼を勝ち取る」という表現もあるが、特に対立状況においてはそうした信頼獲得のチャレンジという側面が前景化するのではないかと考えられる。しかしながら、そうして信頼を「勝ち取った」としても行為者には何か具体的に得られるものがあるとは限らない。例えば、車にガソリンを入れて返却したイスラエル兵士には明確な報奨などは無い。だからこそ「賭け」なのであろうし、それは例えばギリシャ神話におけるアンティゴネーのように、政治的、制度的に分断された状況下で、「間」にいる一人の人間として、真摯な行いを遂行することなのかもしれない。

こうした個人の行いを具体的な内実とともに捉えていくことは重要であると同時に、特に熊倉先生のご発表からは、競争的環境において、「間」につづけることの困難さを感じた。

「間」の存在は双方からスパイや裏切り者として見られてしまう。だからこそ、時に「賭け」とも言える状況が続けるしかないのかもしれないが、そうした賭けに出る存在を言説的に肯定するとともに、実質的に保護をしていくような法や制度が必要だと感じた。ここから、今回のシンポジウムのように歴史的に蓄積されてきた事例を丁寧に読み解いていくとともに、いかに現実的、社会的な働きかけを行うかということが重要になると思われた。

そうした点において、企画展「学知の共創を考える：イスラーム信頼学・シビルダイアログキャラバンの試み」からは、アウトリーチの持つ可能性を感じた。こどもや市民への働きかけは時間をかけた信頼醸成の一つの重要な形であり、人文社会科学全般への信頼が低下している現在、必要不可欠な実践であると思われる。加えて、シンポジウムの内容を受け、「賭け」としてのアウトリーチとはどのようなものでありえるかという問いが想起された。また、展示のコメントの中に「ディシプリンとしての基盤は必要ではないか」、というポストイットがあったことも興味深い。ポストモダン的な状況下では、「学」としてディシプリンを主張するという事自体が、既存の学術領域に還元不可能なある種の「賭け」となる側面があると感じられる。

今回の全体集会は、研究と実践において、そして私たちの日常において、いかに時間をかけた信頼醸成と、「賭け」を通じた信頼獲得を行いうるかということを考える契機となった。